平成 25 年度第 1 回弘前市立郷土文学館運営委員会会議概要

日　時　　平成 25 年 11 月 21 日（木）　午後 2 時 26 分　開会
　　午後 3 時 32 分　閉会
場　所　　弘前図書館２階会議室
出席者　　委　　員　　斎藤三千政　委員長　　片山　良子　副委員長
　　安田　俊夫　委員　　小田桐好信　委員
　　山本　和之　委員
　　郷土文学館　　館　　長　　桜庭　哲紀　　館長補佐　　小山　秀樹
　　主　　幹　　三上　　淳　　主　　査　　若城真佐人
　　企画研究専門官　　舘田　勝弘

会議次第

1　開　会
2　委員長あいさつ
3　会　議
（1）　平成 24 年度事業実施状況について
（2）　平成 25 年度事業計画及び事業実施状況について
（3）　その他
4　その他
5　郷土文学館長あいさつ
6　閉　会

事務局　ただいまから、平成 25 年度第 1 回弘前市立郷土文学館運営委員会を開催します。
　まず、委員長からあいさつをいただきます。

委員長　去る 11 月 16 日、郷土文学館主催の長部さんの講演会「津軽衆と岩木山」が開かれた。聞くところによると、1 週間で 250 枚の整理券が全部捌けたということで、当日もヒロロの 4 階市民ホールは大盛況であった。

　その講演のなかで、岩木山の話がテーマであったが、岩木山の持っている意義深さや存在感の大きさを改めて認識したと思っている。

　言葉にして残す、言葉として残るということが、時間を超えて後世に伝わっていくということ、言葉あるいは文字の持っている意義や価値がこの辺にこそあるのではないか。とすれば、郷土文学館の持っているいろいろな資料の有効活用をすれば、弘前市が持つ文学の深みというものが出てくるのではないかと、長部さんの話を聞きながらそんなことを感じた。

　今後とも、郷土文学館がいろいろな面で後世に残るような仕事をしてもらえればいいなと願って、あいさつに代えたい。

事務局　本日の会議には５名の委員が出席しております。
会議の進行は、委員長が議長となり進めさせていただきます。

委員長　ただいまから、平成 25 年度第 1 回弘前市立郷土文学館運営委員会を開会いたします。

委員長　それでは、本日提案されております案件について、事務局より説明を願います。

〔案件１　平成 24 年度弘前市立郷土文学館の事業実施状況について〕

配付資料に基づき、平成 24 年度弘前市立郷土文学館の事業実施状況について事務局から説明。

委員長　案件１について、御質問、御意見等ありませんか。
［発言する者なし］

委員長　次に、案件２について、事務局より説明を願います。

〔案件２　平成 25 年度弘前市立郷土文学館の事業計画及び事業実施状況について〕

配付資料に基づき、平成 25 年度弘前市立郷土文学館の事業計画及び実施状況について事務局から説明。

委員長　案件２について、御質問、御意見等ありませんか。

委　員　細かいことだが、会議資料 27 ページの「購入資料」の高木恭造のところで、「髙」の字はわざとこの字を使っているのか。会議資料 23 ページの「企画展」の「高木」はふつうの「高」を使っている。高木先生の本を作ったことがあるが、「高」のほうで統一していた。

事務局　ワープロ変換時の見逃しだと思う。「高」に統一しておきたい。

委員長　次に、案件２について、事務局より説明を願います。

〔案件３　その他〕

配付資料に基づき、「入館者数の推移」「企画展、スポット企画展のテーマ一覧」等について、平成 24 年度までの状況を事務局から説明。

委員長　案件３について、御質問、御意見ありませんか。
［発言する者なし］

委員長　会議次第４「その他」について、御意見等ありませんか。

事務局　今回、案件としては出していないが、平成 26 年度予算について、現在予算要求案を作成中であることから、その概要について館長から説明したい。

館　長　郷土文学館については、25 年度と比較した場合、今年度は長部日出雄さんの記念講演会があったので、その分多くの経費をつけてもらっていた。来年度はその分が減って、例年の企画展規模の予算になるので、80 万円の減だけで予算は確保できる見通しである。

委　員　昨年の運営委員会でも話題になった、文学者を紹介するような標柱の設置について、その後どういうふうになっているのか。

館　長　このことについては、市議会でも一般質問があり、請願の関係もあって、われわれとしてもなるべく早い機会に事業を実施したいと、郷土文学館としてはある程度土台となる

ものは作っている。今、郷土文学館に常設展示している10人を基本として、その方々の案内板を作るというのがその案である。これに従って昨年度も予算の案を示し、財政当局にも説明したが、市長のほうから、どうせやるなら文学者だけではなくて、弘前市のさまざまな先人と言われる人たちをもっと取り込んだ形でできないかと。そしてさらに欲を言えば、それによって弘前市を全国的に PR して、観光面の効果を狙いながら行えるようなものとしてもう少し考えろという指示があった。

で、実は教育委員会がこれまでは文化という分野を生涯学習課で所管していたが、たしか平成21年から市長部局の担当となった。現在の組織でいけば文化スポーツ振興課が担当である。先人、文化人の顕彰について、以前、生涯学習課で検討を進めていたものがあったので、そっくりそのまま移管し、引き続き検討しているというところである。

以前、生涯学習課で担当していたときは、どういう方を選ぶかということについてさまざまな見方があるから、できる限り慎重にやりたいという意見があって、そこで選んだあとで、そのなかでも文学者はどうするかということになると思うが、郷土文学館としては先ほども言った10人の方を考えているが、もう少し市の内部で時間をもらって、しっかりとした案を作って進めたいと議会でも答弁しているところである。

案内板については以上のような状況で、遅れていることになるが、郷土文学館としては何も進まないことについては心苦しいところがあり、なんとかその分野で少しでも進められるものが事業としてないかと考えた。現在考えているのは、ホームページで市内にある文学碑を紹介しているコーナーがあるが、単に載せているだけでなく、観光などで来る方々の便宜も考えて、今はやりのスマートホンなどで QR コードにかざせば、現地へ行く地図が示せるようなものができないか検討している。もちろん紙ベースでも文学マップのようなものを考えていて、これらについては経費的にもそんなにかかるものではないので、できれば今年度中、3月までには作り上げて、実行したいと考えている。

委　員　ペンクラブでは3つ請願して、議会ではほぼ満場一致で採択してくれて、できれば前向きなところで一歩でも進んでくれればいいと思っているが、もちろん予算も絡むものであることから、案内板の設置に比べれば、ホームページとかスマートホンというのは簡便な方法かもしれない。最近の高校生などでも全員持っているようだし。

ただ、文学者に関して言えば、ほかの有名文化人とは違った意味で、どちらが偉いというのでなく、その作品だとかという特殊性があるので、その辺を併せて考えてもらいたい。

委　員　文学碑についても分かるが、案内板というのは小さいものでも欲しい気がする。文学者に限らず、一気に出なくても、少しずつ建てていくことが広まっていくことにもなるので、なんとか先鞭をつけてもらいたいと思う。大仰なものを建てる必要はないので、なんとかできないものか。

委　員　太宰治の「まなびの家」を訪ねてくる人はいろいろいるが、彼らの話を聞くと、案内板でなくても、どこかで記念写真を撮ると、フェイス・ブックみたいなものを通して、それを送っているらしい。今の若い人たちはそうした写真によってつながっていく。それもまた魅力的だと思う。単に案内板がそこにあるというのではなくて、写真を通して全国的に宣伝効果として広がっていくと。

委　員　確かに最近の若い人は写真を撮る。そしてそれが広がる。これは前に私が若い人たち

と話したことだが、太宰の小説『津軽』のなかに弘前公園から下町を見下ろしたときの一節があるが、これをお城のその場所に書き記した案内板があれば、それこそ皆さん写真を撮る。そこから太宰の小説を読むことにつながるのかなとも思う。

ただ、案内板を建てるのが文化庁からは不可能だと言われていることがあると聞くが、今年、花見に行って旧天守閣のあった本丸の左側を見たら、現に案内看板が 2 つ建っていた。これは不可能でなかったから設置されているわけで、それを 1 つの参考例として、太宰治のものも可能なのではないかという方向で頑張ってもらえないかと思っている。

去年の今ごろ、私が松山へ行ったとき、『坊っちゃん』の登場人物が出てくる仕掛け時計が道後温泉にあって、30 分おきに坊ちゃんやマドンナが出てくるもので、それに合わせて 30 分おきにたくさんの人が集まってくる。弘前でもそういうような話題になるものをつくる必要があるのではないかと思う。

それから、先ほどの案内板に関連した先人の話で、市長の言うのも分かるけど、郷土文学館では 10 人の基礎となる作家を決めているわけであるから、この 10 人を突破口としてまず建てると。そのあとで商工業者の関係とか文化人その他とかは、第 2 期、第 3 期という形でやっていくという方法だってとれる。あれもこれも一気にやろうとすると、いつまで経っても土俵に上がれないというのが現状である。

委　員　これは請願も通っているので、一歩でも二歩でも先に進んでほしいと思っている。

委　員　BS 放送で 9 月 8 日と 15 日、『神社百景』という番組で、冒頭に太宰治の岩木山を褒める言葉から始まるというのがあった。で、その BS ジャパンが「まなびの家」に取材にきた折、そこからは岩木山が見えるのかと聞いてきたので、ここからは見えないと答えたら、「ああ、そうですか」と言って帰りかけた。そこはなんとか足止めさせて、仕方なさそうに中へ入って撮り始めたら、今度は 2 時間いることになった。そして次は太宰を中心に取材にくると言って帰っていった。

そのとき言っていたのが、立派な文学碑でなくていいということと、BS ジャパンの人も「まなびの家」に来るのに非常に迷って、やっと見つけたと。まだカーナビには入っていないようである、4 月から始めたから。したがって、太宰の学生時代の下宿があるよということだけでいい、立派な文学碑や案内板よりもちょっとした情報のほうがいいというところを感じた。

で、その BS ジャパンの放送を見たという人が翌日来た。テレビの力というのはものすごいと感じた。神社のほうでなく、番組のなかにあった「太宰の家」というのに注目して、早速訪ねてきたというのである。

委　員　平成 24 年から始めたギャラリー・トークというか、文学講座について、「今官一のペンネーム」16 人、「生柿吾三郎の税金闘争」16 人とあって、たしかに有名どころで言えば寺山修司だったり、太宰治だったりして、それはそれでやるべきだろうが、人物小史の売れ行きを見ると、今官一のがいちばんよくない。たしかに今官一は地味である。今官一を次に取り上げる時期というのはあるのか、没後何年とか。

事務局　生誕は太宰治と一緒なので、陰になってしまうところがある。

委　員　あれだけのものを書いて、読むとものすごく兼ね合いのある文章だが、頑張って読むとすごくいいのである。元は詩人だけあって、言葉の使い方とかレトリックとか、ふつう

の作家とはずいぶん違う。もちろん彼の身上は、歴史のなかに埋もれる人々、アイヌの人々を書いたところにある。そういう心根とか、向かっていく方向とか、できてきた作品とか、そういうところの瞬間的な美学というものはかけがえのないものと思われるもので、何かしら今官一を取り上げる時期があればいいなと思っている。

それからもう一点、郷土文学館は確かにノスタルジーのように、過去に生きた作家の文学碑や案内板を作るというのは重要な役割だと認識はする。それはこれからも引き続き顕彰し続けていただきたい。

ただ、今、作家のまね事をやっている若い人が弘前にはたくさんいる。俳句などは山ほど会があるし、詩もそこそこ多いし、そういう現在うごめいている若い人たちに郷土文学館でどうやったらアクセスできるだろうかとぼんやり考えていた。例えば文学講座に世良啓さんが来て寺山修司の話をしたりしているが、そういう生きのいい未完成の作家たちをうまいぐあいに巻き込む面白いことができないかと考えていた。

それ以外に、書いている人同士というのは横のつながりがない。同人誌もここは昔からたくさん出ているが、茶飲み話をするぐらいでいいから、そういう場所がないものか。つまり、博物館のようにならないためにも、今動いている人たちに対してある種応援していく――もちろんお金がどうこうというものでなく、態度として応援していくというものができれば、彼らにとってもいいだろうし、彼ら以外に、今の若い者がどういうものを書いているのだろうかという興味で参加してくれる人もいるだろうと思う。これを明日からやってくれというつもりではなく、これがあったらいいなということで話してみた。

委　員　若い人たちの集まりというのは、同人誌とか結社というのは違うけれども、確かに横のつながりがない。どこか拠点になるようなところがあれば、そこに集まってくるのかなという気はする。若い人たちは連絡をとり合わない。それでいて関心を持っている。

委　員　だから願わくは、ここからいずれ芥川賞や直木賞をとる人が生まれてほしいし、そういうようなものを考えたときに、郷土文学館の役割をもう少し緩く、あるいは広く考えれば、何かがあれば、その何かはよく分からないが、それがあるとすごくいいことができるように思う。

委　員　今の意見はよく分かる。例えば『北奥氣圏』にはいろいろな論客がいるので、その『北奥氣圏』の名で何かイベントをやるについて、会場を貸して文学を語らせるということが考えられる。で、その次は詩の朗読会ということにするなどしてイベントをやれば、若い人たちが集まる、来てもらうということもできるのではないか。館を利用する門戸を広げてほしい。

委　員　それ以外に、ここの出身で、京都大学を出て映画監督として活動している人もいる。彼はいろいろな面でこっちの文化を全国的に発信している。映画ということでは、観光コンベンション協会と連携して講演とかして、映画と観光と文学がコラボするということも考えられる。これの音頭をとるところをどこか決めてやるという、そういう発想も今後は必要でないかと思う。

委　員　私たちが今こうして議論をしていることができるのは、太宰がいるおかげであり、石坂洋次郎がいるからであり、先人の残してくれたいわゆる預金の利子で食っているようなもので、先人がなんでそういう利子を残したかといえば、次に来る人のためにであって、

その人たちをどうやって皆で応援してやるかということを考えると、ジャンルは問わないほうがいいように思う。今の映画というのもすごく重要な分野だと思う。

委　員　足を引っ張るのでなくて、手を引っ張るということだ。

委　員　そうそう。いわゆる表現というものに対するわれわれの姿勢というものをこれから少しずつ議論していって、「会場貸します」でもいいから、何かしらお手伝いできることがあれば、提携していってもいいのではないか。

委　員　長部さんの講演会、とてもいい話を聞けたようだが、これから先、また聞けるということにならないかもしれないとすれば、講演会が無事終わったからいいというのでなく、抜粋や要旨でいいから文字に残せないものだろうか。つまり、今回の講演はこういうふうなことを話していましたよということを記録にとどめ、毎回それを小冊子にするということ。それが積み重なるとすごい資料になる。毎回、企画展ごとに講演会をやっているわけだから、つくる方向で考えてみては……。

委　員　小冊子も大好きだが、ＶＴＲを回して映像記録にしておいて、そのままでは長いから、編集して１５分ぐらいで見られるようにして、方言詩のコーナーにあるモニターで要約して見ることができるようにする。これもまた溜めていくと、すごい分量の記録になるし、証になると思う。

委　員　長部さんの講演に限らず、生の講演の映像があって、生の顔があって、それが残るというのは超第１級の資料である。

委　員　肖像権の問題もあるが、それは本人の承諾をとればいい。ただ、ＤＶＤは、講演会が２時間あれば、２時間分になるわけだが、これをうまく編集するというのはなかなか難しいことではないのか。

委員長　いろいろな話がほかにもあると思うので、運営委員会だけでなく、また、舘田専門官のところへ来て情報交換――われわれだけでなく、いろいろな人が来て情報交換をする、これもまた必要なことではないかと思う。運営委員という立場ではあるが、他の団体の人たちと郷土文学館でコーヒーを飲みながら情報交換でもしようかという雰囲気があってもいいのではないかと思う。

　そういうことで、今後もいろいろなことを検討していくこととして、本日はこれで終わりにしたいと思いますが、よろしいですか。

［全員異議なし］

委員長　ないようですので、これをもちまして本日の日程はすべて終了いたします。

委員長　郷土文学館長よりあいさつがあります。

館　長　（あいさつ）

事務局　それでは、これをもちまして平成 25 年度第 1 回弘前市立郷土文学館運営委員会を閉会します。

【弘前市立郷土文学館事務局作成】